



A member of the Roche group

中外製薬株式会社

“XenApp 環境を共通化したことで、XenApp の管理を情報システム部で一元化できました。これにより、各部門で XenApp を管理していた担当者は、より価値の高い別の仕事をすることができ、システムの柔軟性を高め、コストを削減できるのであれば、XenApp を導入し、かつ、共通化しない手はないと思います”

情報システム部 ITインフラグループマネジャー 岡村 真吾 氏

Citrix XenApp環境を全社で共通化し、業務アプリケーションの展開を高速化。MRのタブレット端末によるモバイルワークにも活用

中外製薬は、「革新的な医薬品とサービスの提供を通じて新しい価値を創造し、世界の医療と人々の健康に貢献します」というミッションを掲げ、ロシュ・グループの最重要メンバーとして、国内外で革新的な新薬を継続的に提供する日本のトップ製薬企業を目指しています。「がん」「腎」「骨・関節」などの分野を戦略的な領域と位置づけ、薬剤の貢献度と患者さんの治療満足度が低い「アンメットメディカルニーズ」の領域において、化学合成技術や中外製薬の独自の強みでもある「バイオ抗体技術」「標的分子探索技術」などの最先端技術を駆使することで、国内外で独自性の高い革新的な医薬品の創出に取り組んでいます。

課題：2000年から利用している XenApp の運用管理効率化

中外製薬では、2000年に副作用のデータベースを利用するためのアプリケーション環境に Citrix® XenApp® (当時の名称：Citrix MetaFrame) を導入しています。このアプリケーションは、臨床試験の治験データの収集や解析のためのもので、クライアントサーバーのシステムでしたが、その海外展開において、XenApp を採用したのがシトリックスとの出会いです。中外製薬 情報システム部 IT サービスグループ PRISM チームの太田 光氏は、「古い Windows 環境で使っていたアプリケーションを引き続き利用したいという声もあり、そのための仕組みとしても XenApp を利用していました」と当時を振り返ります。また 2007 年には、臨床業務の部門からリモートでシステムを使いたいという要望があり、Citrix NetScaler® Gateway (旧名称：Citrix Access Gateway™) を利用したリモートアクセス環境を構築。さらに、治験が必要な製品も増えてきたことから、外部の協力会社が XenApp 経由でアプリケーションを利用するための仕組みとしても利用を開始しました。現在では、リモートアクセスのために NetScaler Gateway を広範囲で利用しており、XenApp 上のアプリケーション、および XenApp 以外のアプリケーションへのアクセスの両方に活用しています。太田氏は、「情報が端末に残らない XenApp と、SSL VPN アプライアンスである NetScaler Gateway の組み合わせは有効でした。このリモートアクセスの仕組みは、緊急時に社外からシステムにアクセスするためにも活用できます」と話します。その後、社内のさまざまなシステムに XenApp が導入されはじめ、必要に応じて都度、XenApp サーバーを用意していました。中外製薬 情報システム部 IT インフラグループマネジャーの岡村 真吾氏は、次のように語ります。「システムや部門毎に XenApp サーバーが分散してしまったために運用管理が煩雑になり、対策が必要でした」。そこで中外製薬の IT 活用をサポートしている NEC ネクサソリューションズから「標準 Citrix 環境」が提案されます。NEC ネクサソリューションズ 技術開発事業部 主任の松縄 和明氏は、「プロジェクトごとに XenApp の設計、構築を繰り返すのはコストメリットが期待できません。そこで XenApp 基盤を共通化して展開することを提案しました」と話しています。

ソリューション：XenApp基盤を共通化し「標準Citrix環境」を構築 ディザスタリカバリー(DR)サイトを用意し、BCP対策も万全

中外製薬では、2010年より、分散した XenApp 基盤の共通化を開始。2011年に「標準 Citrix 環境」の運用を開始します。「標準 Citrix 環境」では、Windows XP 用のアプリケーションは Windows Server 2003 で稼働する XenApp に、Windows Vista および Windows 7 用のアプリケーションは Windows Server 2008 で稼働する XenApp にと、バージョンごとの環境とテンプレートを作成。テンプレートにより、短時間でアプリケーション配信を実現できます。松縄氏は、「標準 Citrix 環境では、Web Interface やデータストアなども効率化しています。現状、Web Interface サーバー配下に 38 ファームが存在します。今では、Web Interface、ライセンスサーバー、データストアを共通化したことで、ユーザーの利便性、システム管理者のメンテナンス性が向上し非常に便利です」と話します。XenApp サーバー数は、現在約 120 台。そのほとんどを仮想化しており、現在はピーク時で 350 ~ 400 ユーザーが同時接続しています。そのほか「標準 Citrix 環境」では、災害・障害対策や事業継続計画 (BCP: Business Continuity Plan) の一環として、XenApp 環境が稼働するサーバーを冗長構成にしているほか、遠隔地のデータセンターにディザスタリカバリー (DR) 用のサイトも用意されています。

課題

- システムや部門ごとの XenApp 環境構築による、コスト・運用管理負荷の増大

ソリューション

- XenApp の設計から構築、運用までの基盤を共通化

ベネフィット

- XenApp サーバーの構築、運用管理の負荷軽減とコスト削減
- XenApp 基盤の共通化による、セキュリティ設定の標準化とライセンスコストの適正化
- タブレット端末と XenApp による MR のモバイルワークの推進

導入アプリケーション

- MR 営業支援システム
- 人事／経理系申請委ワークフロー

Citrix 製品

- Citrix XenDesktop、Citrix XenApp (ライセンス数：約 1,000)
- Citrix NetScaler Gateway
- Citrix AppDNA



中外製薬株式会社
情報システム部
IT インフラグループマネジャー
岡村 真吾 氏



中外製薬株式会社
情報システム部
IT サービスグループ PRISM チーム
太田 光 氏



中外製薬株式会社
情報システム部
IT インフラグループ 基幹システムチーム
鶴見 仁亮 氏



NEC ネクサソリューションズ株式会社
技術開発事業部
主任
松縄 和明 氏

導入効果：XenApp 基盤の共通化でシステムの柔軟性を高めコストを削減 営業部門に約 2,100 台の iPad を配布し、モバイルワークを推進

「標準 Citrix 環境」を構築した効果として、まず OS とアプリケーションを分離できたことが挙げられます。太田氏は、次のように語ります。「アプリケーションのライフサイクルを柔軟かつ長期的に考えられるようになったことで、アプリケーションの改修やテストの回数を減らすことができ、開発コストを大幅に低減できました」。また中外製薬では、欧州やアジアにもビジネスを展開していることから、多言語に対応することも必要でした。太田氏は、「国内の利用者だけでなく、欧州や中国などの幅広い利用者に、一つのシステムで多言語のアプリケーションをサポートできるのは非常に便利です」と話します。さらに効果的だったのが、医薬情報担当者 (MR: Medical Representative) 向けに、約 2,100 台の iPad を配布してモバイルワークを実現できたことです。iPad 専用アプリだけでなく既存の Windows アプリケーションも利用できるようになりました。iPad 向けに Citrix Receiver™ を配布後もまもなく、1 週間で約 950 ユーザーが XenApp 環境を利用しました。各 MR は、外出先やお客様先などから iPad を利用して、Windows 環境で構築されている MR 営業支援システムや人事/経理系申請ワークフローなどを Citrix Receiver 経由で利用しています。一方、中外製薬 情報システム部 IT インフラグループ基幹システムチームの鶴見 仁亮氏は、「かつては部門や業務ごとに XenApp ライセンスを購入していましたが、情報システム部でライセンスをまとめて購入、管理することで、ライセンスコストを適正化できるようになりました」と話します。鶴見氏はまた、次のように話します。「社内に分散した XenApp 環境を共通化したことで、セキュリティ設定も標準化できました。これにより、基本的には禁止しているファイルのローカルディスクへのダウンロードやアップロードを、必要に応じて特定の人だけに可能にすることもできます。セキュリティを担保できるので、安心してアプリケーションを公開できます」。岡村氏は、「XenApp 環境を共通化したことで、XenApp の管理を情報システム部で一元化できました。これにより、各部門で XenApp を管理していた担当者は、より価値の高い別の仕事をすることができるようになりました。システムの柔軟性を高め、コストを削減できるのであれば、XenApp を導入し、かつ、共通化しない手はないと思います」と話しています。

今後のプラン：XenAppの活用で在宅勤務の対象者拡大やBYODの導入にも期待 AppDNAにより、既存アプリケーションのWindows 8 対応も検証

今後の取り組みについて太田氏は、次のように語ります。「すでに一部の社員が、会社支給の自宅設置 PC から、障害発生時や緊急時に社外からシステム対応しています。今後も XenApp を活用することで、始まったばかりの在宅勤務の対象範囲を拡大できるかもしれません。また、要望があれば個人のデバイスを社内で利用する BYOD (Bring Your Own Device) の導入も検討していきたいと思っています」。また中外製薬では、PC のローカル環境で動かしているアプリケーションも存在します。これらのアプリケーションを Windows 8 環境に移行できるかどうかを、Citrix AppDNA™※でチェックしています。岡村氏は、「Windows 8 に対応できないアプリケーションは、バージョンアップをするか、現バージョンのまま XenApp 上に移行して動かすことを考えています。」と話しています。

※ XenApp/XenDesktop 7.5 の提供開始時より、AppDNA は XenApp および XenDesktop の Platinum Edition にのみ付属します。

